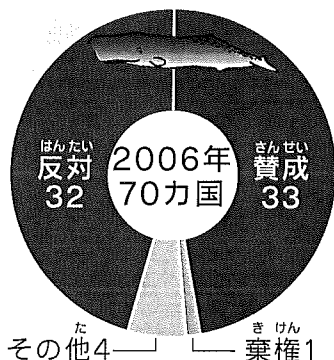
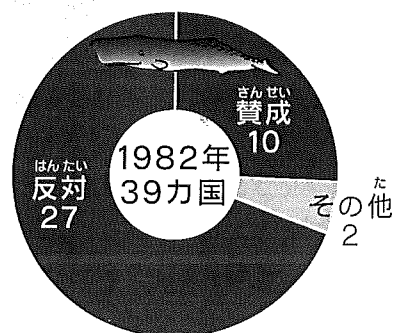




しょうぎょう ぼがい
商業捕鯨に賛成？

はんたい
反対？



(国際捕鯨委員会総会での投票)

①日本近海に姿を見せたマッコウクジラ=神奈川県小田原市沖で
②古くから食べられてきたクジラ料理

クジラの捕獲をめぐって、日本やノルウェーなど賛成の国々と、アメリカ、オーストラリアなど反対の国々との対立が続いている。クジラを大切な水産資源と見るか、保護すべき野生動物と見るか——など双方の考えには大きなへだたりがある。日本は商業捕鯨の再開を働きかけている。クジラ論議はどこに向かうのだろう。

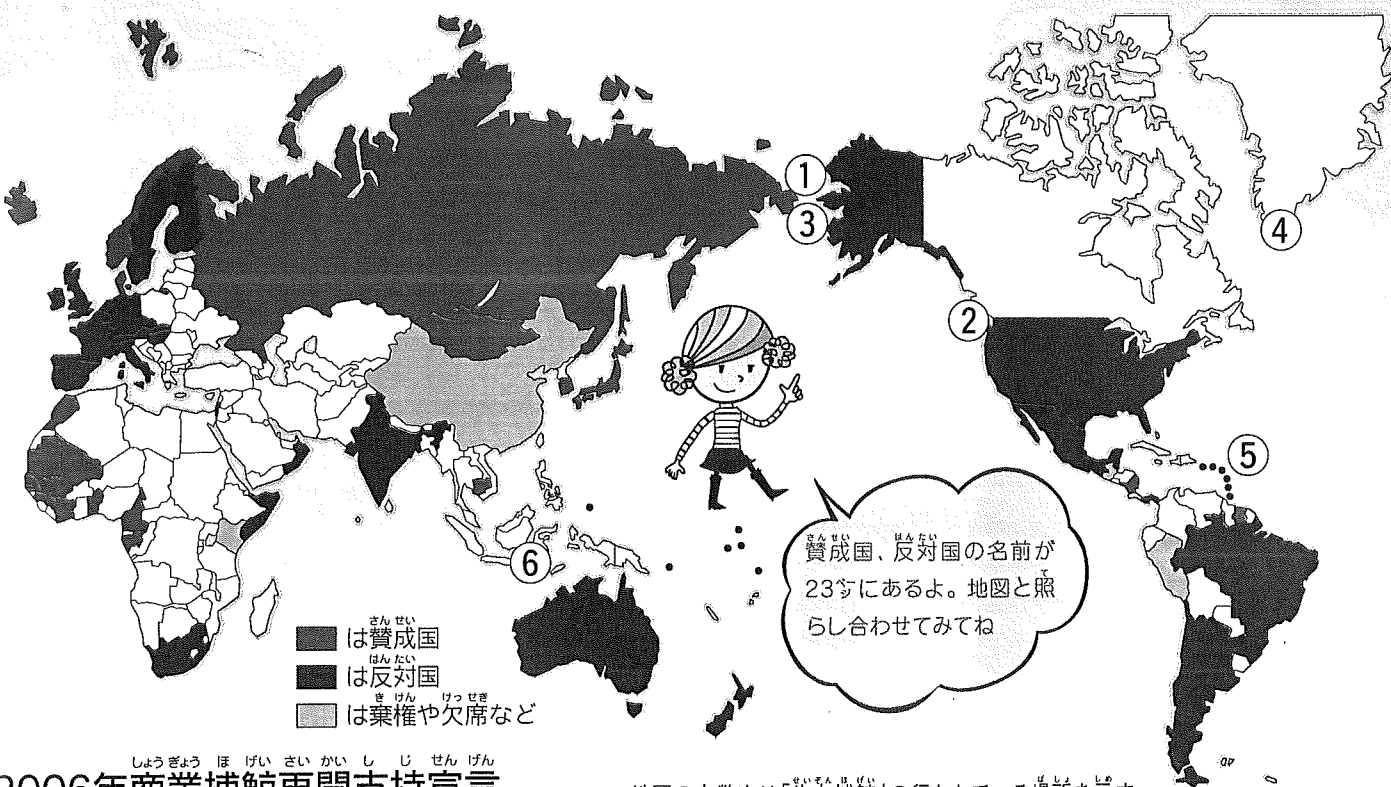


賛成派、反対派がほぼ半々なのね

商業捕鯨とは、食用などに販売するのを目的としてクジラを捕獲すること。クジラを捕りすぎた反省から、国際捕鯨委員会(IWC)は1982年に商業捕鯨の禁止を決め、現在も続いている。これまでIWC内では捕鯨反対派が賛成派を上回っていたが、2006年6月の総会でわずか1票差ながら、商業捕鯨の再開を支持する宣言が採択された。クジラの生息数は回復してきているという日本などの主張が通ったかたちだ。しかし、実際に再開するにはIWC加盟国の4分の3以上の賛成が必要で、道のりはまだけわしい。5月末にアメリカのアラスカで今年の総会が開かれる。再開支持の動きは強まるのだろうか。

国際捕鯨委員会 (IWC)

IWCはInternational Whaling Commissionの略。クジラを国際的に管理するために、国際捕鯨取締条約により1948年に設置された。当時のおもな捕鯨国15カ国で発足し、日本は51年に加盟した。2007年3月現在の加盟国は73。商業捕鯨の一時禁止(モラトリアムという)のほか、1979年にインド洋、94年に南極海に捕獲を禁止する海域(サンクチュアリという)を設定した。毎年開かれる総会では、捕鯨賛成国と反対国が激しく対立。近年は捕鯨支持の加盟国が増え、賛成派と反対派の勢力はほぼ等しくなっている。



2006年商業捕鯨再開支持宣言

地図の丸数字は「生存捕鯨」の行われている場所を示す

商業捕鯨は禁止となっているが、一部の国では今も行われている。日本は「調査捕鯨」という形でクジラを捕っている。ということなのだろう。

商業捕鯨

古くからの捕鯨国であるノルウェーは1993年に商業捕鯨を再開した。アイスランドも2006年10月、約20年ぶりに再開した。どちらも国際捕鯨委員会(IWC)の加盟国だ。再開は、IWCの決定であっても「異議」を申し立てればそれにしばられないという規則にのっとったものだ。ノルウェーは年間500～600頭のミンククジラを捕獲している。

調査捕鯨

クジラの生息数や生態などのデータを集めるため、日本が1987年から実施している。こうした捕鯨は国際捕鯨取締条約で認められている。南極海や太平洋でミンククジラを中心に年間約800頭を捕獲。2006年から第2期調査が始まり、大型のナガスクジラを約30年ぶりに10頭捕獲した。調査に使われなかったクジラの肉は食用に販売されている。

生存捕鯨

昔からクジラを生活のために捕ってきた北極圏の先住民などにはIWCも捕鯨を認めている。アメリカの①イヌイットや②マカー族、ロシアの③チュクチ先住民、デンマークの④グリーンランドやカリブ海の⑤セントビンセント・グレナディーンの人たちだ。IWCに加盟していない⑥インドネシアなどでもわずかだが捕鯨が行われている。



全長26mのシロナガスクジラの骨格標本。山口県下関市の市立水族館「海響館」で。

規制の対象は大型クジラ13種 世界には約80種類のクジラがいる。海の生きものだが人間と同じほ乳類だ。国際捕鯨委員会(IWC)の規制の対象になっているのは、全長約30m、体重約150tにもなる地球上最大の生きもののシロナガスクジラをはじめ、ナガスクジラ(全長約20m)、マッコウクジラ(約15m)、セミクジラ(約15m)、ザトウクジラ(約15m)、ミンククジラ(約10m)など大型の13種。これより小型のツチクジラやゴンドウクジラ、イルカ類などはふくまれない。

・ほ乳類……背骨があり、肺で呼吸し、乳で子どもを育てる動物。



それぞれの考えを聞いてみようよ

賛成派の言い分

- クジラの資源は回復してきている。数を減らさないように利用するのは可能
- クジラは大量の魚を食べる。増えすぎは漁業に影響をあたえる
- 捕鯨やクジラを食べるのは伝統的な文化で、大事に残したい

反対派の言い分

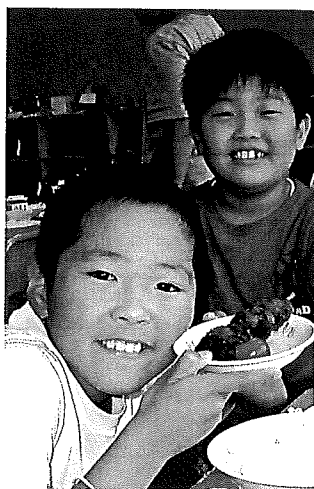
- 十分に増えているとはいえない。大がかりな捕鯨を再開すれば回復は不可能に
- 魚の減少は取りすぎなどが原因。クジラのせいにするのはおかしい
- 食生活は変わっており、クジラの消費がのびるとは思えない

? クジラは増えているのか

日本の調査などによると、商業捕鯨の禁止後、クジラの生息数は増えている。南極海のミンククジラは20世紀前半の十数万頭から約76万頭に増え、マッコウクジラやニタリクジラなどの数ももどりつつあるという。しかし、かつては約20万頭もいたとされる南極海のシロナガスクジラは約1,700頭にとどまるなど、回復が十分でないものもある。

・ミンククジラの数には国際捕鯨委員会(IWC)の科学委員会が再調査が行われている。

? クジラと漁獲量との関係は

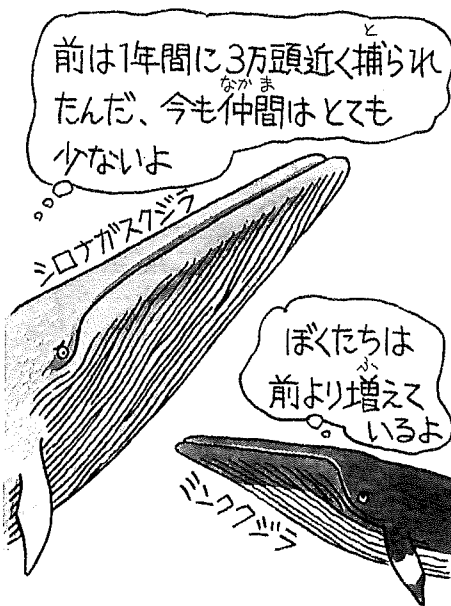


北海道釧路市の小学校では、4年前に約40年ぶりにクジラが給食に復活した。この日のメニューはクジラのくしかツ=2006年10月

日本の調査捕鯨の結果、クジラがイワシやサンマなどを大量に食べていることがわかった。クジラが1年間に食べる魚の量は3億〜5億トで、世界の漁獲量の3〜5倍にあたるという。増えすぎは漁業に打撃をあたえるという賛成派の理由だ。反対派は「クジラのせいというならクジラが乱獲される前に、とっくに魚はいなくなっていたはず」と反論する。

? クジラ食の文化はどうか

戦後の食糧不足の時期、日本人にとってクジラは大切なたんぱく源だった。日本人が口にした肉類の40%がクジラだった年もある。家庭の食卓や学校給食で大活躍した。その後、牛肉や豚肉などにおされ、クジラ肉へのなじみがうすれているのは確かだ。各地でクジラ肉を学校給食に取り入れたり、クジラ料理のPR活動が行われたりしている。



クジラはまるごと利用されてきた

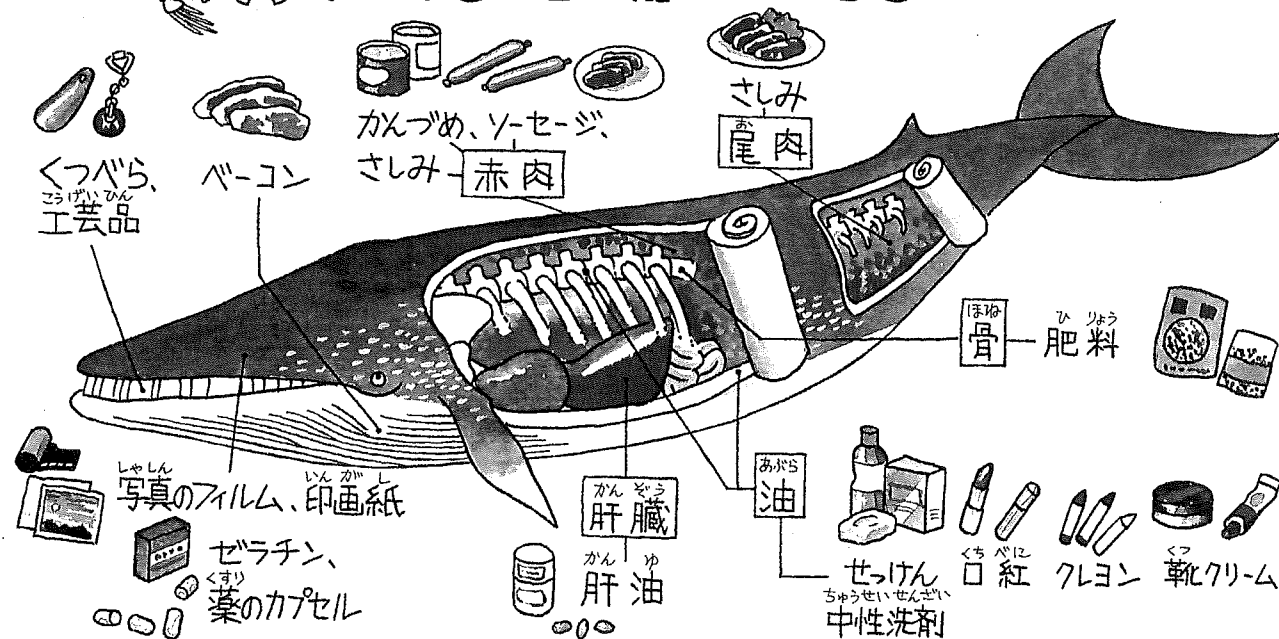


イラスト 内山大助

「鯨ポータル・サイト」の資料などから作成

利用の仕方に大きなちがい



日本の沿岸で続いている小型クジラの漁＝和歌山県・熊野灘で2006年9月

日本では江戸時代に沿岸でのクジラ漁がさかんになり、今も和歌山県・太地、北海道・網走、宮城県・鮎川、千葉県・和田でツチクジラなど小型クジラの漁が行われている。日本の捕鯨は肉、皮、内臓、油など、捕獲したクジラはまるごと利用してきた。

捕鯨反対のアメリカ、イギリス、オーストラリアなどもかつては捕鯨国として多くのクジラを捕ったが、機械に使う工業用やせっけんなどの原料になる鯨油を得るのが目的だった。石油が広く出回るようになると、クジラ漁から次々に撤退した。

クジラを食用としたかどうかなど、利用法のちがいも賛成国と反対国のミゾを深めている。反対国には「クジラは頭のいい特別な動物」という意見もあり、話し合いが感情的になることもある。

賛成の国 (33)

■アジア→日本/カンボジア/韓国/モンゴル ■ヨーロッパ→デンマーク/アイスランド/ノルウェー/ロシア ■中南アメリカ→アンティグア・バーブーダ/ドミニカ/グレナダ/ニカラグア/セントクリストファー・ネビス/セントルシア/セントビンセント・グレナディーン/スリナム ■アフリカ→ベナン/ガメルーン/コートジボワール/ガボン/ガンビア/ギニア/マリ/モーリタニア/モロッコ/セネガル/トーゴ ■大洋州・オセアニア→キリバス/マーシャル諸島/ナウル/パラオ/ソロモン諸島/ツバル

反対の国 (32)

■アジア→インド/イスラエル/オマーン ■ヨーロッパ→オーストリア/ベルギー/チェコ/フィンランド/フランス/ドイツ/ハンガリー/アイルランド/イタリア/ルクセンブルク/モナコ/オランダ/ポルトガル/サンマリノ/スロバキア/スペイン/スウェーデン/スイス/イギリス ■北アメリカ→アメリカ ■中南アメリカ→アルゼンチン/ペルー/ブラジル/チリ/メキシコ/パナマ ■アフリカ→南アフリカ ■大洋州・オセアニア→オーストラリア/ニュージーランド

アクセスしよう

日本捕鯨協会・捕鯨問題Q&A

<http://www.whaling.jp/qa.html>

水産庁・捕鯨班

(クジラ捕獲についての国の考え方など)

<http://www.jfa.maff.go.jp/whale/indexjp.htm>

グリーンピース・ジャパン

(捕鯨をめぐる問題点など)

<http://www.greenpeace.or.jp/campaign/oceans/>

クジラ・イルカ類図鑑

<http://svrsh1.kahaku.go.jp/mmml/flash/pictorial/>

読んでみよう

「クジラ・イルカ」

(進化がわかる動物図鑑、ネイチャー・プロ編集室、ほるぷ出版)

「クジラー大海をめぐる巨人を追って」

(水口博也・作、金の星社)

「クジラ、驚異の世界」

(ジャック・T・モイヤー・著、フレーベル館)

「クジラも海でおぼれるの?」

(加藤由子・著、熊谷さとし・絵、偕成社)

「クジラの超能力」

(水口博也・著、河合晴義・絵、講談社)